

## 《実践報告》

### 芦屋学園サッカースクールについて

#### —芦屋学園の地域貢献事業設立と現状報告—

金 相 煥

#### 1. はじめに

スポーツは本来、高齢者、女性、子ども、障がいのある人も含め、すべての人々が自由に楽しめるものでなくてはならない。その目的を果たすためにも、誰もがスポーツに親しめる環境づくりが不可欠となる。

しかし、周りを見てみると、スポーツをする子としない子の二極化が進んでいること、少子化に伴って各学校单位でチームを結成することが難しくなっていること、部活に所属しない生徒・子どもにはスポーツをする機会が限られていること、単一種目・單一世代で構成された地域のサークルやチームの多くはメンバーが固定化し、高齢化が進んでいること学校開放や公共のスポーツ施設の利用がいわゆる常連の人たちによって占有されてしまっていることなど、必ずしも地域住民が気軽にスポーツ活動を行える環境とはなっていないのが現状である。<sup>1)</sup>

芦屋大学は昭和 39（1964）年福山重一氏により、教育学部「教育学科」の単科大学として産声を上げた。本学の建学の精神は（近年の）文部科学省の方針とも一致しており、平成 23（2011）年度よりは大学や短期大学の教育課程に「職業訓練」を盛り込むことを義務付けている。本学では創立期から推奨している職業指導学を発展させ、現在の大学教育に求められるキャリア教育に活かすためにサッカースクールの運営や指導現場での実体験を行うことを実践的な学びの場として、教育研究機能を生かした社会貢献と連携を目的として大学の社会的使命を果たしていく理念も持っている。「人それぞれ転職に生きる」をモットーに学生教育に力を注いでいることには変わりがない。

芦屋市や近隣地域に住む小学生に昔ながらの「空地」感覚でサッカーが楽しめる環境と、芦屋学園の施設を有意義に開放することで地域との密接な交流を図ることを目的として、芦屋学園サッカースクールを立ち上げた経緯ならびに実践を報告したい。

#### 2. 芦屋のサッカー

##### 2-1 芦屋のサッカーの歴史

芦屋のサッカーの歴史を辿ってみると、1948 年（昭和 23）11 月に芦屋体育会（現在の体育協会）が設立され、1952 年（昭和 27）8 月に芦屋サッカークラブが発足した。

1968 年（昭和 43）に精道中学校のグランドを利用して少年のサッカースクールの活動を開始した。1973 年（昭和 48）に 4 つの小学校（宮川・精道・山手・朝日ヶ丘）校区でそれぞれサッカースクールが開講した。

兵庫県サッカー協会のもと芦屋市サッカー協会は、昭和44年11月23日に県下13地区のひとつとして設立された。設立当時は社会人6チームの登録で発足された。芦屋という土地柄から市内にサッカーチームを編成できる程の規模の企業が存在しないため、すべてクラブチームであった。

少年（4種）は昭和40年代初めに芦屋市教育委員会が少年サッカースクールを開設していたが、協会設立に伴いその運営を引き継ぎ、補助事業から委託事業になり、また再度、補助事業になるなど、行政の方針にふりまわされながらも、教育委員会の実施していた芦屋市内単一スクールの方針を、各小学校にクラブ（スクール）を開設する方針に転換し、指導者の発掘と育成に努力した。

昭和62年度には芦屋市内全小学校区にクラブ（スクール）を開設することが実現し、それ以後は「児童の居住する校区のクラブ（スクール）以外には入会出来ない」とする完全地域制を徹底するとともに指導者もその校区の居住者が担当することを原則とした。この方針が芦屋市のコミュニティ構想と一致し、底辺の拡大とサッカーの普及に大いに役立ったといわれている。

芦屋サッカー協会は、各年代（高校、中学、少年、少女）の指導者との交流も活発に行い、指導者講習会、技術講習会、審判講習会等の事業も積極的に開催し底辺の拡充と小学生から高校生までのそれぞれの年齢に応じた指導法の開発に取り組んでいる。<sup>2)</sup>

## 2-2 芦屋市におけるコミスクの歴史的背景と現状

芦屋市の人口は94,539人である（2018年4月現在）。市内の教育環境では大学で芦屋大学が1校のみ、高等学校は公立では兵庫県立芦屋高校、私立では甲南高校と芦屋学園高校の計3校が存在する。現在（2018年4月現在）中学校が3校（精道・山手・潮見）、小学校が8校（精道・宮川・山手・岩園・朝日ヶ丘・潮見・打出浜・浜風）、その他に中高一貫校として兵庫県立芦屋国際中等教育学校が1校存在している。

中学校以上では学校単位、各種目単位で課外活動である部活動が存在している。小学校においては、各地域に根差したコミュニティ・スクールという制度で週末や授業終了後に運動する機会を設定しているのが現状である。

コミュニティ・スクール（通称：コミスク）とは、自分たちが生活する地域社会（小学校区が基本的な範囲）の中で一人ひとりが市民としての自覚と責任を持ちながら誰もが参加できる文化活動・福祉活動・地域活動等を通じて、真に心豊かでゆとりのあるまちづくりを目指すという共通目標を持った共同体である。

昭和52年、芦屋市は総合計画の「コミュニティーセンター構想」を小学校単位に、学習活動や地域交流を軸としたコミュニティの形成を目指す「芦屋市コミュニティ・スクール構想」に変更し、昭和53年三条小学校に「三条コミスク」を設置したのを皮切りに、昭和61年までに全小学校区（9校）にコミスクを設置された。各小学校を、学校の教育活動の支障のない範囲において地域住民に開放し、自主的な文化活動・スポーツ活動を通じて、学校・地域・家庭の連携と住民相互の連帯感や自治意識を高め、よりよいコミュニティの創造を図ることを目的に活動している。

コミスクの運営は、その小学校区で活動している自治会、老人会、こども会、PTAなどの団体や、文化・スポーツサークルによって構成され、原則として団体登録制度をとっている。登録団体の代表者で構成される「運営委員会」とその下部組織である「専門部会」によって、年間の活動方針や地域交流事業の内容が決定される。また毎月開催される「幹事会」では、施設利用等についても協議し、コミスク活動における学校施設の管理については、運営委員会が責任を持って当たるので、役員や指導者はすべてボランティアである。

そして活動内容については、以下に示しているが、地域の特性を踏まえながら自主的に活動しているので、その活動内容は多種多彩である。<sup>3)</sup>

表1 コミスク地域一覧

名称	設立（昭和）	地域	内容
三条	53年9月1日	山芦屋, 西山, 三条, 月若, 清水, 西芦屋, 三条南, 前田	子ども会, 老人クラブの協力が大きく, 三世代交流の場となっている。
朝日が丘	54年11月27日	若葉, 緑, 潮見, 陽光, 海洋, 南浜, 涼風	心豊かな人づくりとより豊かな潤いのある 地域生活の実現を目指す。
潮見	56年4月5日	打出小槌, 宮塚, 若宮, 宮川, 浜, 西蔵, 吳川	文化・体育・レクリエーション等の活動を通じて、連帯感や近隣社会の創造や推進を目的に活動グループや、地域の人々により運営されている。
宮川	57年12月19日	春日, 打出, 南宮, 大東	幼稚園児からお年寄りまで1000以上が 一緒に楽しむイベントを通じて豊かな街 づくりを考えている。
打出浜	57年12月19日	新浜, 浜風, 高浜	地域と学校が共に手を携え、地域社会の 発展と「心のふるさと」のまちづくり活動を考えている。
浜風	58年12月4日	新浜, 浜風, 高浜	目的を持ったクラブ活動の実りとうれし い出会いの機会も増えている。
岩園	58年12月10日	六麗荘, 岩園, 翠ヶ丘, 親王塚, 楠	「子どもも大人も共に育つ」をモットー に、心豊かな人づくりに精進している。
精道	60年3月30日	茶屋之, 大槻, 公光, 川西, 津知, 竹園, 精道, 浜芦屋, 平田北, 伊勢, 平田, 松浜	次代を担うこどもたちとこれまでの地域 の発展に貢献してこられたお年寄りを大 切にするコミスクを目指す。
山手	61年3月21日	奥山, 奥池, 奥池南, 山手, 大原, 東芦屋, 船戸, 松ノ内, 業平, 上宮川	大人も子どももこのコミスクが「ふるさ と」としていつまでも心に残る活動がで きればと願い活動している。

表2 コミスクの活動内容

文化活動	絵画・書道・コーラス・陶芸・英会話・茶道・華道
スポーツ活動	サッカー・野球・バスケットボール・ミニバスケットボール・バレー・ボーリング・ テニス・バトミントン・フットサル・ペタンク・空手・卓球・体操
地域交流活動	夏まつり・秋まつり・運動会・餅つき大会
広報活動	「コミスクだより」の発行及び配布
コミスク交流活動	コミスク合同文化展など

### 3. 芦屋学園スクール設立に向けて

#### 3-1 芦屋市と芦屋学園の関係について

芦屋市及び芦屋市教育委員会と学校法人芦屋学園・芦屋大学は平成28年8月4日にスポーツ、文化、芸術、地域人材の育成、教育の分野で相互に協力し、地域社会の発展と人材の育成に寄与する目的を持って包括的連携を結ぶことが締結された。

内容は以下の通りである。

- ① スポーツ、文化、芸術に関すること
- ② 地域人材の育成に関すること
- ③ 生涯学習に関すること
- ④ 施設の利用に関すること
- ⑤ 防災・災害に関すること

#### 3-2 芦屋市4種の現状

芦屋市の小学生年代のチームは6チームである。学校校区内のコミニスクで活動している山手三条、朝日ヶ丘、打出浜、宮川、リベリオン（岩園・潮見・浜風が合体した）そして唯一のクラブチーム芦屋サッカークラブ（SC）が存在している。芦屋の4種年代で芦屋SC以外は、指導を選手の保護者がボランティアで指導している。そうした中、中学に進学すると中体連又は地域のサッカーカラブに進学してサッカーを継続するものが傾向で見られる。

#### 3-3 芦屋学園サッカースクールの設立趣旨

芦屋大学にはスポーツ教育センターが存在し、芦屋モダリズム計画でプロ野球選手を輩出した経緯もあり、スポーツ活動やスポーツを通じての社会貢献を推奨している。バスケットBリーグ西宮ストークスの育成チームである兵庫インパルスや野球でのブルーサンダーズをはじめ多種目において社会活動はしていたものの、サッカーデ部分で地域に根ざしたクラブを開設することは今回が初めてであり、また学園内のスポーツ分野で体系的に高大連携の一貫指導体制が確立しながら活動しているのはサッカーデ部分だけである。2016年に芦屋学園人工芝グランド（芦屋市陽光町2丁目）が完成し、地域にスポーツ活動を貢献できる環境が整った。また芦屋学園は小学校以外の教育機関をすべて備えている。7年間の指導体制は確立出来ていることを含め、より底辺を広げるうえで地域に貢献できる環境（人工芝）のハード面と指導スタッフが充実しているソフト面を備えていることを地域に貢献しようという趣旨を持って、まずは小学生年代のスクールを開始する運びとなった。

在学期間に必要とされる学生教育・地域貢献活動・芦屋学園をPRすること・サッカーを通じての芦屋学園のイメージアップと知名度向上を目標とし、大学生の卒業後の就職に向けたインターンシップの場の提供にもなることを考えればスクール活動は有意義な活動になると想え、芦屋学園サッカースクール設立の経緯に至った。

#### 3-4 スクール設立までの経緯

以下の手順で芦屋学園の理事会に提案し、芦屋学園スクール及び芦屋学園ジュニアユースの設立に至ることとなつた。<sup>4)</sup>

平成 28 年 2 月 7 日（火）第 23 回常勤理事会にて協議

サッカースクール、及び芦屋学園中学校サッカー部設立（案）について

平成 28 年 12 月 13 日（火）第 24 回常勤理事会にて議決

サッカースクール、及び芦屋学園中学校サッカー部設立の件

平成 29 年 6 月 6 日（火）第 9 回常勤理事会にて協議

芦屋学園サッカークラブ中学部設立について

平成 29 年 6 月 16 日（火）第 10 回常勤理事会にて議決

芦屋学園サッカークラブ中学部設立の承認

### 3-5 芦屋学園サッカースクールの募集活動について

スクール開設が決定してから、募集活動をどのようにするかが一つの懸念材料であった。既存の地域コミュニティ、地域のサッカークラブとの関係性を加味したうえで各チームの責任者と指導者の方への電話連絡、練習会場へ訪問してのビラ配り、また試合会場へ積極的に視察に行くことで芦屋学園サッカースクールの存在を知っていただけよう勧誘した。そして、4 月の募集に向けて 2 月から 3 月に体験練習会を 3 回（2 月 13 日・20 日・27 日）に開催した。その甲斐もあり、口コミなどで評判が広まり、芦屋地域以外の西宮地域からも体験練習会に参加する生徒が出たことは今後地域拡大につながる兆しがあると考えられる要因である。

## 4. 芦屋学園サッカースクールの活動指針

### 4-1 芦屋学園スクールのコンセプト

#### 4-1-1 芦屋学園スクールの活動目的（趣旨）

- ①～地域貢献～ 指導経験豊かな育成のスペシャリストの指導を地域スポーツへと還元し、地域スポーツの発展に努める
- ②～振興・育成～ 日本サッカー界を担う選手の発掘と育成を目指す
- ③～教育活動～ 芦屋大学生にとって、次世代の教育者、指導者を養成する教育研究活動の一環の場とする

#### 4-1-2 芦屋学園スクールのクラブ理念

クラブ設立の上で 4 つのキーワード「セレクションはおこなわない」「サッカーが好きな選手に環境を与える」「活動場所がない選手にサッカーができる環境を与える」「芦屋市の 4 種年代で育成した選手たちを芦屋地域で育てよう」を掲げている。

#### 4-1-3 芦屋学園スクールのチーム活動理念 『E N J O Y フットボール』

E = Endeavor (継続的な努力)

1 日 1 日の努力の積み重ねが「夢」を現実のものとさせる。

N = Next (いつも『未来を』『次を』生涯のベストとする)

いつも次のプレー、次の試合、次の行動・・・が自分にとって最高のものとなるよう全力を尽くそう

J = Just do it (行動が未来を変える)

今できることは、必ずやろう。今日のベストが尽くせなければ成長はない。

明日が勝手に人を成長させはしない。

O=Off the Pitch(サッカーを通じて人を育てる)

メリハリを持って行動しよう。

Y=Yoke (絆)

1年間は短い。同じチームにいる絆を大切にし、全員が一つになり、目標、夢を達成しよう

#### 4-1-4 芦屋学園サッカースクールの指導理念『 PLAY SOCCER 』

PLAY (プレー) の本来の意味は「遊ぶ」である。遊ぶということは、楽しくなければいけないと考えている。負ければ面白くないし、プレーを成功しなければ楽しくない。出来るようになる楽しさ、仲間と力を併せて戦う楽しさ、勝つ楽しさなどの「本当の楽しさ」を感じてほしい。そして、遊びは全力でやるから楽しい「やるときはやる」という理念のもと、短時間集中でトレーニングを行う。

### 4-2 芦屋学園サッカースクールの特色

#### 4-2-1 指導の統一・一貫指導体制

サッカースクールの究極の目的は「上につながること」「クリエイティブな選手を育成すること」である。最近の子供の傾向は「遊びから始めたのではなく、競技として始める」傾向にある。ゆえに偏った運動能力が子ども達にとって悪い影響を与えている。この観点からもサッカー以外の動きにも着目した動きの習得を目指している。

#### 4-2-2 スタッフが様々なチームを指導

指導者全員が2つ以上、それも「カテゴリー」・「ポジション」も違う多種多様なチームで指導を行っている経験値がある。このことで先に捉われず2年先、3年先しいては10年先の選手像を意識しながら、「小学生年代で、何が必要か」「小学生世代に、何を習得させたいか」を考え、日頃の練習メニュー作成にあたっている。また、練習前には綿密なミーティングも行っている。この練習において「何を学ばせたいか」という具体的なメニュー設定とキーワードをスタッフ陣で共通理解を図ったうえで実践に臨んでいる。

#### 4-2-3 ゴールキーパーの育成

スタッフ6人中、3人が選手時代はゴールキーパーを経験している。よって、ゴールキーパーの育成や練習メニューのきめ細かさでは他のチームよりも充実した指導ができる利点がある。グランドも人工芝なので、汚れを気にせず、思い切ってゴールキーパーのトレーニングが行える環境である。

#### 4-2-4 世界の一流の指導を受ける環境

夏休み期間を利用してスペインのプロチーム「デポルティーボ・ラコルニア」のミゲル氏又はファン氏を日本に召集している。選手、スタッフを含め、スペインの戦術理論や本気の指導を「生」で見学でき、指導していただけることができる。この企画は毎年行っていくつもりだ。

#### 4-2-5 手に届くところに見本がある環境

芦屋大学・芦屋学園高校サッカーチームは文武両道をモットーとし、心（礼儀）・知（勉強）・体（運動・サッカー）である3つの要素を備えた選手を育成し、人間性も高めていくことが目標である。グランドで「体」を身に付け、グランド以外では「心」・「知」を身に付ける。その点で、グランド内ではサッカーのプレーの

良い見本があり、グランド外でも「あいさつをすること」「カバンと靴を並べる整理整頓」など身近に手本となるモデルがいることこそが子供たちがみて学ぶ環境である。「百聞は一見にしかず」である。新しく入部してきた生徒たちもすぐにその環境に慣れて同じ態度や行動をするようになる。

## 5. 芦屋学園サッカースクールの現状

### 5-1 芦屋学園サッカースクールの実績

芦屋学園サッカースクールには、総勢 27 名の子供たちが加入してくれた。学年の人数、コースごとの人数、地域における人数分布は以下の通りである。

表3 学年の人数

学年	小2	小3	小4	小5	小6	合計
人数	4	4	4	6	9	27

表4 コースごとの人数

	月曜日	水曜日	合計
16:30~17:30	0	11	11
17:30~19:00	11	9	20
	11	20	31

表5 地域における人数分布

	山手三条	潮見	打出浜	宮川	岩園	神戸市内	西宮市内	合計
1年								
2年	1			1		1	1	4
3年				4				4
4年				3		1		4
5年	1		1	4				6
6年	2	1		2	4			9
計	4	1	1	14	4	2	1	27

週1回コース、週2回コースを選択制にし、表4でも示したが、2017年12月現在週2回コースを希望している者は4名である。大多数の選手は週1回コースで参加している。理由としては、本スクールが開設する前から近隣のサッカースクールに所属しており、興味を持っていただいた選手が既存のクラブの活動日でない月曜日又は水曜日のどちらかの活動日を選んで本スクールに参加してくれている。

開設する際に保護者の方々からご要望として月曜日と水曜日の週2回しか活動できないのかという相談

も受けている。週2回以外の火曜日にも活動日を増やしてほしいとの要望があった。その理由としては別の習い事（特に塾）との兼ね合いである。塾・公文などの習いごとに積極的である保護者の方々が芦屋市には多く存在し、まずは勉学を中心に学校帰宅後の時間に当てているのが現状である。その観点からして、夕方以降の時間帯は人それぞれであるため、いつでもサッカースクールに参加でき、空いている時間にサッカーを楽しめるようにするためには活動日の増幅は今後の課題点であると思われる。

本スクールの目的は地域開放・地域密着がテーマであるのでその部分においては生徒たちに譲歩する形で今後の活動日・活動時間を調査選別していくことが最重要課題ではないかと考えている。

また、平日の練習は定期的・計画的に行えるが週末や長期期間にイベントの開催や試合を行うことでスクールの上達を見ることも顧客満足度につながると考える。現在所属しているコミスクや地域のクラブチームに支障のない程度で今後さらにイベント活動を活発に行っていきたいとも考えている

### 5-2 クラブ内における学年別指導

活動日は月・水曜日の2日間である。16:30～17:30の小学校1・2・3年生クラスの時間帯は1時間、17:30～19:00の4・5・6年生は後半の時間帯で1時間半を基本としている。練習メニューの最後は必ず試合形式のゲームを入れることにしている。最初に技術練習や個人戦術を紹介し、繰り返し練習した後、その動きを試合でトライさせる。また、そのことが上達につながることを加味したトレーニングメニューを毎回の練習で組み入れている。低学年にはボールを使った動きを中心に、高学年にはボールテクニックに加えて対人動作を含んだ実践的なメニューも多く取り入れている。

### 5-3 コーチの役割・大学生の指導

練習にはスクールマスターのコーチに加えて、大学生と一緒に指導及びプレーを行う。大学生にとっては現場指導の実体験になるので積極的に参加するように促している。部活動時間外又は大学就業時間外に行う活動なので、参加に対して意識の高い学生と低い学生とは両極端化しているのが現状だ。しかし、なるべく平等に参加するように学生同士で調整させ、回数を重ねるごとに意識が低い学生でも子どもたちと触れ合うことによって我を忘れて一緒にプレーに励み、楽しんでいる様子が多々見られる。

また、子供たちにとっては、コーチほど年齢が離れておらず、お兄さんみたいな存在が一緒にボールを蹴るということで楽しさが倍増しているように感じる。

プレーの面では、大学生の個々の技術レベルに差があるが、普段子ども同士でミスをしてしまうパス交換などが大学生とプレーすることでうまくでき、成功体験を多く経験できるというプラスの面がこのスクールには存在する。普段の練習では回ってこないパスやミスしてしまう場面においてうまく大学生がパススピードを調整するなどして、ミスパスをミスパスにせず動きを成功させてくれるので、子供たちにはプレーが上手くできた成功体験を数多く詰める場である。この状態は子供たちの成長段階にとってはうまくなる絶好の環境であり、実際に自チームに戻って「うまくなったね」と地域のコミスクのサッカー指導者に褒められたという意見をたくさん確認している。

## 6. 芦屋学園スクールの活動報告（アンケートによる）

スクールに所属している小学生 24 名、その保護者 22 世帯、運営指導にあたった芦屋大学サッカーチーム学生 37 名（2018 年 3 月）を対象にスクールに関するアンケート調査を実施した。

### 6-1 方法

アンケートの項目は以下の通りである。

スクールで活動している小学生に

- ① スクールへの参加率は何パーセントですか
- ② スクールは楽しいですか
- ③ スクールで指導を受けて、うまくなつたと感じますか
- ④ 指導スタッフの印象は（特に大学生スタッフの印象は）
- ⑤ スクールの良い点を 3 つ記入してください。

スクールに参加させている保護者には

- ① 指導について
- ② グランド環境について
- ③ 指導スタッフ（特に大学生スタッフ）について
- ④ 学園スクール独自の良い点について

指導にあたっている学生には

- ① 現場での指導で難しいと感じたことは何ですか
- ② スクール指導を行ってみて発見したこと又はサッカーの理解が深まったことはありますか

上記の各質問に対して、「100%・80%・60%・50%・50%以下」、「非常に楽しい・まあまあ楽しい・普通・少しだけ楽しい・楽しくない」、「大変うまくなつた・少しうまくなつた・変わらない」、「良い・普通・悪い」など質問に応じた回答の選択肢を記したアンケート調査表を使用し、回答を得た。また、上記の質問において「記述」と記してある項目に関しては、自由記述とした。

### 6-2 結果と考察

スクールの参加率について約 7 割が 100% 参加しており、残りの約 3 割も 80% の参加率であった。スクールの充実度については、「非常に楽しい」が 8 割で「まあまあ楽しい」が約 2 割を占めている。「うまくなつたか」という設問に対しては、ほぼ全員がうまくなつたと感じていた。指導スタッフと学生スタッフの評価についてもほぼ全員が「良い」との評価を示している。

スクールの充実度のグラフから「非常に楽しい」との評価を 8 割以上の選手がしている。そのことからスクール参加率 100% の選手が多い理由と考えられる。指導スタッフと学生スタッフへの評価については、ほぼ全ての選手が「良い」という評価をしてくれており、芦屋学園サッカースクールの充実度を表していると考える。

図1 芦屋学園サッカースクールのよいところ（スクール生回答）

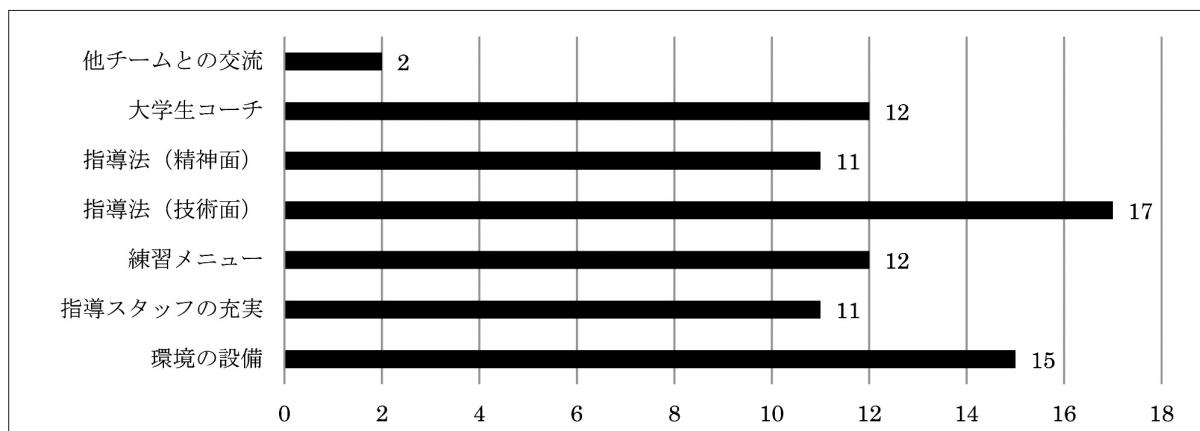


図2 指導についての評価（保護者回答）

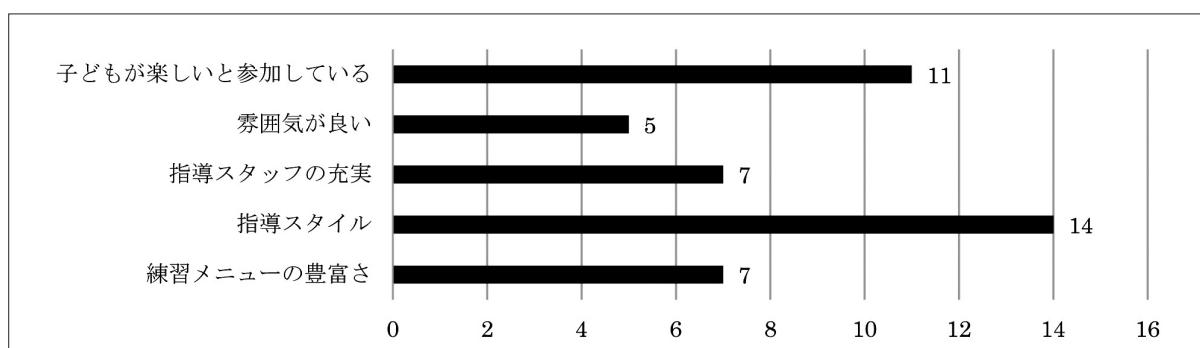


図3 環境についての評価（保護者回答）

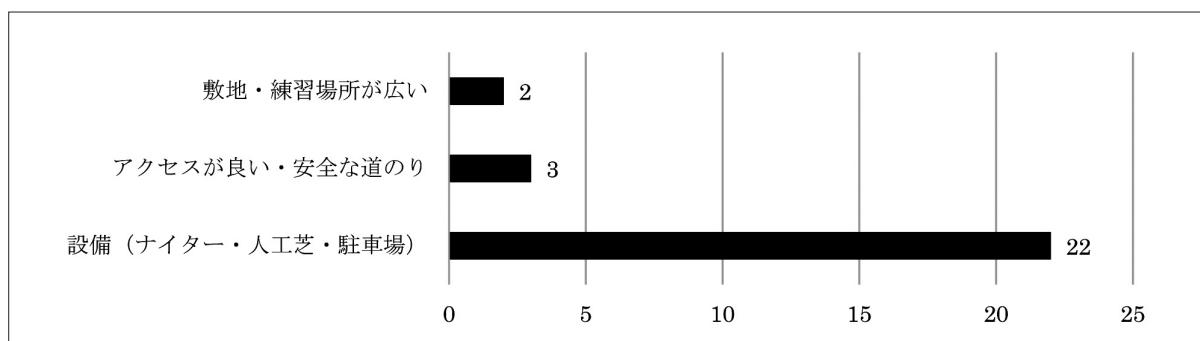


図4 大学生スタッフへの評価（保護者回答）

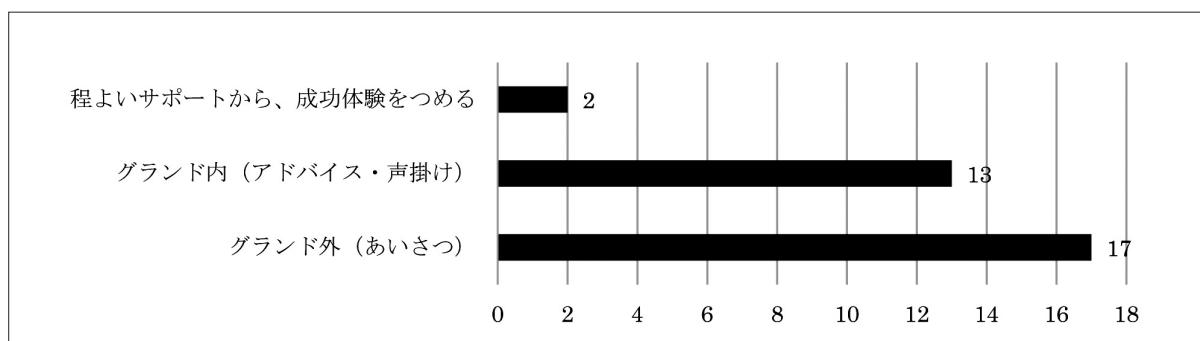
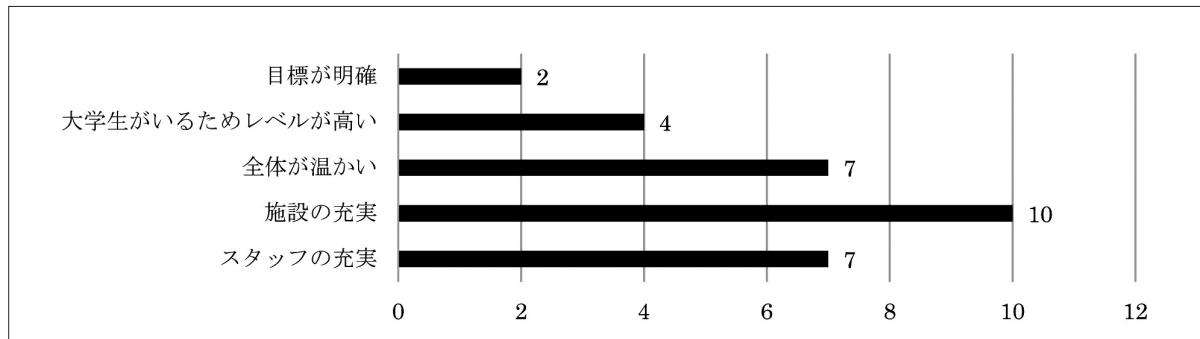


図5 サッカースクール独自の良い部分の評価（保護者回答）



保護者から「細かい点も丁寧に指導してくれる」という答えや、「練習場所が人工芝で楽しい」という技術面・環境面の答えが多い中、「ミスをしても怒らずアドバイスをしてくれる」や「いいプレーをしてコーチが褒めてくれる」などの精神面のカバーに対しての評価が高かったことに印象を受けた。

指導については、選手たちと同様にミスをした後の声掛け、アドバイスや、良いプレーをしたあと褒めてくれるなどの精神面の評価を多くいただいた。そしてなにより、子どもが楽しいといって参加してくれるため安心して任せられるという評価もいただいた。

環境面については、やはり人工芝とナイター設備という整った点に多くの評価をいただいた。理由として、雨の練習であっても人工芝のため汚れないという意見も多く挙げられた。そのほかにもケガの心配が少ないなど保護者の不安が軽減されていることも高評価につながったと考えられる。

大学生スタッフへの評価の大半は、あいさつなどの礼儀についての意見が多く、身近に見本となる選手がいるためスクール生も影響されてあいさつを進んでするようになったなどのお声をいただいた。

図6 指導は難しいと感じたか（大学生回答）

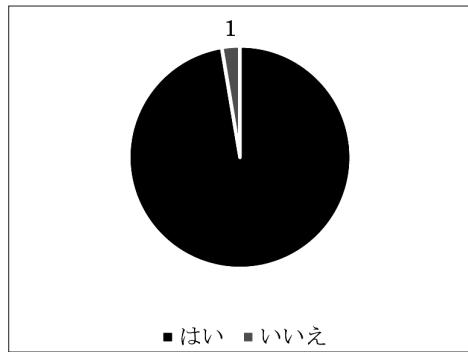
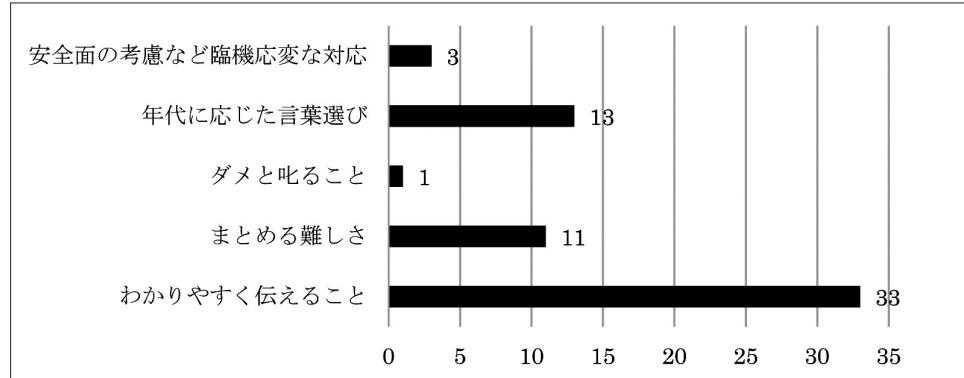


図7 何に難しさを感じたか（大学生回答）



大学生のアンケートからサッカーの指導経験がない学生が多く見られた。その中で、スクール指導に対して積極的に参加している学生が多いことが伺える。学生はコーチとして教える立場ではあるが、スクール生である子供たちから逆に学ぶことや指導法を身に付けたりなど学生にとっても学びの場となっていることがわかる。指導をしてみて、難しいこととして挙げられている言葉選びや伝え方などはスクール指導だけではなく、社会に出たとしても必要な力であり学生にとって貴重な体験の場になると考えられる。

## 7. まとめ

「芦屋の地域に貢献したい」「芦屋市内のサッカーボー少年への活動場所の増加を図ること」これが芦屋学園サッカースクールを立ち上げた大きな目的である。学校法人芦屋学園は一貫指導の体型が組織的に確立されている。横の関係だけでなく、縦の幅広い人間関係の交流に適した組織体型が現に存在している。

その組織体型と、人工芝グランドが完成した施設環境を利用した芦屋学園サッカースクールは、芦屋市内を中心に多くの子供たちに平日のサッカー環境を提供できること、サッカーを通じて人間形成を行う環境作りが出来たことは成功である。このスクールでサッカーをすることで「サッカーが楽しい」と感じる子どもたちが増えたことも、芦屋市のサッカー界には貢献できていると考える。

また、核家族化が進み、一人っ子が増加傾向にあり、兄弟との交わりや家族・近親者とのコミュニケーションが不足している大学生が多く存在している中、このスクールにおける小学生との交わり・交流する機会が学生たちには良い影響と経験を与えると考える。特に、教員志望者や幼児教育関係への就職を志望している学生には、大学時代に実体験を経験できるまたとない機会である。単位取得を目指す授業でもなく、少しばかりの拘束があるバイトでもなく、ボランティアとして純粋にサッカーを通じて子供たちと時間を共有する機会と環境が芦屋学園のグランドには存在する。

施設の利用、放課後時間の有効利用、学生スポーツを通じての人間形成、この新たな社会貢献活動が地域の人々に認知され、芦屋市内にある唯一の大学である芦屋大学が芦屋市と密接な関係性を保ち、青少年育成事業又は芦屋市の活性化に向けて更なる取り組みを今後も行うことを期待して報告したい。芦屋市にサッカーを通じて、他のスポーツ種目も含めたスポーツ文化の定着を夢見て今後も発展的に取り組んでいきたい。

## 参考文献

- 1) 黒須充：総合型地域スポーツクラブの時代 1～部活とクラブの協働～. p.10, 2009.
- 2) 芦屋市体育協会：芦屋市体育協会 50周年記念誌, pp.50-52, 1997.11.
- 3) 芦屋市ホームページ. 教育・市立学校一覧. <http://www.city.ashiya.lg.jp>, (参照日 2018年8月4日).
- 4) 理事会会議議事録.